Okinawa Prefectural University of Arts

太陽信仰に基づいて創建された首里城

－古代エジプト古代ギリシアの例から見る－

高　草　　茂

はじめに
1. 古代エジプトの太陽信仰
2. 太陽信仰の異なる表象
3. 古代社会を侵蝕し吸収したキリスト教
4. 王権と富を護る太陽神
5. 古代地中海周辺の城塞・宮殿
6. ミュケーナイ城塞宮殿と首里城
結び
参考文献

はじめに

「きみたちはあの狂気の人のことを耳にしたことはないか、明るい午前にランタンの灯をともし、市場に走って〝神はどこだ！　神はどこだ！〟と叫びつづけていた、あの男のことを。」（ニーチェ『悦ばしき知恵』）。

「神は死んだ」と告げるニーチェの姿は、近代ヨーロッパ思想とその文化の苦衷を象徴的に語る。キリスト教にあってもイスラーム教にあっても、神は求められなければ、人々の前に現われない。教義を異にするとはいえ、人間のいかなる宗教も、本質は祈りにある。

こうした大宗教は、歴史的にみれば、おおむね紀元前後に生まれている。それは人間が自ら人間とは何かを問い、その自覚を抱くようになった時期に当っており、自然を支配しようとする人間中心主義がこれらの宗教とともに歩み出す。それらはやがて「自然」を拒み、「自然」に対峙し、征服するようになり、「自然」への畏怖を忘れ、「自然」のメカニズムを探ろうとし（科学の発展）、そのメカニズムを自分たちの利益を得るために利用するようにな

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

る。

トインビーは、「5千年のむかし、最古の文明がおこって、当時の人間社会に、生活物資の余裕と社会的組織力とをはじめてあたえたとき以来、人類は、戦争というものに絶えず悩みつづけてきた。そもそも生活物資の余裕とか社会的組織力とかが生じなかったとすれば、戦争といういわば変態的な社会制度も決して出現しえなかったのであった」(『歴史の教訓』) と語っている。

自然のメカニズムを探し出し、それを戦争に利用した最たるものは、原爆である。現代の世界的秩序の体系が「核」によってつくられている現状こそ本来あるべき人間社会の「変態的」制度と認識すべきであるのに、多くの人々はそのことを忘れ去らせようとしている。「人間の原罪」をここに見て、この「変態」の状況を改めることをしなければ、「人類は自ら築いてきたすべての財宝を、築いてくるに当って用いてきた手段によって自らを失う」(トインビー同書) ことになるだろう。

いま、語られる「文明の対立」とは、キリスト教の世界観に支えられてきた文明と、イスラーム教その他の宗教の世界観によって支えられてきた文明との対立を言おうとしているようであるが、より一層視野を拡げてみるならば、人間が自らを律するために育んできた宗教と、自然に融和してその自然の中に身を置くというところから育まれてきた宗教との対比を、考えるべきではなかろうか。後者を代表する宗教は、仏教、儒教、道教であり、その他キリスト教やイスラーム教から異教或いは異端、邪教と見做されている自然宗教の全てを指すと考えられる。従って、軽々しく「文明の対立」という概念を、歴史に当て嵌めてみてはならないと思う。「現代」を把らえるにも、この概念で考えるには余りにも単純過ぎ、危険をともなう、というべきであろう。

人間にとって救いの神、栄光の天上、永遠の生命といった祈りと憧憬の世界は、原点からみればいずれの宗教においても、本質的には光輝く太陽への畏敬、即ち天を仰ぐ太陽信仰を根底にして描かれる。反対に、呪いの世界、忌むべき地下、滅びの象徴は、大地が荷うが、それ故にその闇に通ずる大地から甦るものとして生命をこの地上に育む「母性」が大事にされる。

出産の呪術に関連するものと考えられるヴィレンドルフの女性裸像

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

（ヴィーナス像、オーリニャック期〔紀元前３万～２万５千年〕）をはじめ、大地の豊穣と女性の生殖力に対する信仰から生まれた地母神は、世界各地に見出される。文明社会が形成されて信奉されるさまざまな女神－シュメールのイナンナ、古代エジプトのイシス、古代ペルシアのアナヒータ、カルタゴのタニット、クレタの蛇女神をはじめ、古代ギリシアのヘーラー、アフロディーテ、アテーナー、アルテミス、デーメーテール、レアーなどがそうであるが、キリスト教における聖母マリアも、本来そうした女神信仰に連なる。琉球王朝の聞得大君が荷った神性も同じものと考えられよう。

しかし、トインビーが指摘するように、生活物資に余裕ができ、社会的組織ができあがるとともに、地母神信仰は後退させられ、代って戦いの神－例えば、古代ギリシアの軍神マルスなど－が祀り上げられ、〝戦争という変態的社会制度〟が形成される。

悪魔に魅入られたこの世の姿を凝視するとき、誰しも思わず〝神はどこにいる！〟と叫ばずにはいられない筈である。科学が生み出してきたすべての近代兵器の犠牲となった人間の姿は、見るに耐え難い、残忍な悪魔の爪跡を生々しく伝える。『聖書』に「人は人にとって狼〝Homo homini Lupus〟」と書き記された狼は、古代ギリシアでは軍神マルスの聖獣であったが、西欧中世では、獰猛、狡猾、貪欲のゆえに邪悪の象徴とされ、狭く言えば「異端の象徴」となった。

『旧約聖書』「創世記」では、天地創造の第四日目に、太陽と月と星が造られたと記されている。神はこう語った－

「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ」

この世は、そのようになった。

神が「光あれ」と言われると、光があった。その光を見て、神は良しとされる。そして光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼んだ、という（「創世記」）。

この創生の記は、単にキリスト教においてのみ、言われることではなく、この地上に在って人類が生きるようになって以来、時代や地域、民族の距て

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

なく、理解されることである。ここに、太陽信仰が生まれる原点が存在する。

この太陽信仰の表われ方は、時代や地域、民族によって異なるものの、しかし、社会の形成、国家の成立、文化の発祥の根底に必ず見出すことができるのである。例え、古代エジプトと古代ギリシアの国家体制や文化が相互に大きく異なるにせよ、それらの体制を支える基盤は、太陽が東から昇り、全てを明るみに出して育み、西に沈むという歩みの、人類が生きていく上での根源的な理解の上に在る。太陽が西に沈んでから訪れる闇は、地下の闇と同じく、死の世界を告げる。生と死は、太陽に直結した現象にほかならない。太陽信仰がいかなる地域にも民族にも存在するのは、そのためである。

一、古代エジプトの太陽信仰

古代エジプトにおける「天地創造」の神話では、創造以前の世界は「混沌（カオス）の水」とよばれ、形をもたない物質の混沌とした集合体からやがて「原初の丘」が出現し、そこに創造神が現われて混沌から秩序をつくり出す、と語られている（J・チェルニー『エジプトの神々』ほか）。

この「混沌の水」と「原初の丘」の観念は、毎年繰り返されるナイル河の増水を反映したもので、洪水で両岸にあふれた水がひきはじめると最初に小高い丘が姿を現わし、そこに生命の活動がはじまるからだ、という。

しかし「秩序」ある世界が創造されたからといっても「混沌」が完全に姿を消したわけではなく、いつ再び全てが混沌となってしまうか、解らない。創造神マアートの定めたこの「世界秩序」を維持するため、この世界に生きるすべての人々が努力しなければならず、その役割はとくに王（ファラオ）が担うべきものとされた。

創造神マアート（Maat）は、真理、正義、宇宙の秩序の概念をいい、神格化されて女神の姿で表わされる。太陽神レー（Re、またはラーRaとも表記される）の娘で、頭上に駝鳥の羽根を戴く女性像として描かれ、国王（ファラオ）はこのマアートの国家的化身であった。従って、「世界秩序」の維持・管理は、国王が荷うべきものとされたのである。

古代エジプトの「天地創造神話」のうち、今日残されているものの多くは断片的で、必ずしも全容が明らかにはされていないが、代表的な「ヘルモポ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

リス神学」が述べるところによると、「原初の丘」に太陽神アトゥムが「自生」し、その精液から大気の神シュウと湿気の女神テフヌーが生まれ、この兄妹の神の交わりによって大地の神ゲブと天の女神ヌートが生まれ、シュウがヌートを持ちあげて天地が分離した、という。この記述は、『旧約聖書』の「創世記」によく似た構成を示すもので、シュメールの「ギルガメシュ叙事詩」やギリシア神話に記されていることにも連らなるものである。更に地域や時代を越えて、普遍的な宗教の原点をみるならば、イスラームにおける唯一神アッラー Alläh やゾロアスターにおけるアフラ・マズダ Ahura Mazda や、古代インドのヴェーダ聖典にみるブラーフマン Brahma など、いずれも共通する神性を示している。しかし、それらが相互に影響してつくられた神性である、とみるか、或いは各地域においてそれぞれ独自に発生したものとみるかは、古代文明の発祥の地が分散している（現在　旧石器、新石器時代に人類の移動があったのではないかという考古学的研究が進められているが－）ことと考え合わせ、研究者たちの推定・立証を俟つほかない。

また他の「ヘリオポリス神学」によれば、ゲブとヌートの子として男神オシリスとセト、女神イシスとネフティスという〝死〟と〝再生〟に関わる四神を合わせた九神一座にオシリスとイシスの子を含める神統譜が形成され、王位継承の正当性を保証する「王権神話」もそこに組み込んで、アトゥムに代って主神となった太陽神レーが国家神の地位を得、王は「レーの子」であるとされるようになる。そして新王国時代（紀元前1550年頃から同1099年頃）には、創造神は「太陽神」であるという観念が強まり、創造神たちは自分の名の上にそれぞれ「レー」を置き、太陽神の属性を加えて「創造神」としての地位を正当化した。当時の国家神アメンも「アメン・レー」を正式名称とし、その地位を明示したのである（プルタルコス『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』、尾形禎亮「宗教と神話」、鈴木八司監修『エジプト』）。

このレー神（またはラー神）は、もともとカイロ北東のヘリオポリス（現在のマタリーヤ）の太陽神で、創造主、太陽神のアトゥム神と一体になって初源の創造神となり、「宇宙秩序」の主マアート女神の父として、現世のみならず来世にもその威光を及ぼす。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

このレー神の信仰は非常に古く、すでに古王国第二王朝（紀元前2890年頃～同2686年頃）の王名に「レー」の名が見られ、第四王朝（紀元前2613年頃～同2494年頃）のジェデフラー王（有名なギゼーのピラミッドで知られるクフ王〔紀元前2589年頃～同2566年頃〕の子）は、初めて「レーの子」と自称している。創造神が「宇宙」を生成するために立つヘリオポリスの高い「原初の丘」(ヘリオポリス神話による)の象徴がピラミッドであるとするならば、第四王朝時代にはレー神の信仰が国王の間に決定的なものとなったと考えられる（鈴木八司「宗教と神話」前記所収)。

実際にレー神信仰をファラオが公式に取り入れたのは第五王朝（紀元前2494年頃から）以降で、これよりのち「レーの子」はファラオの正式称号の一つとなった。すなわち、レー神は、自ら創造した宇宙の秩序に従い、エジプトを統治する国王の王権の安定と権力の基盤になったことを示すのである（前記「宗教と神話」所収)。

古王国が成立する以前の初期王朝時代（紀元前3100年頃～同2686年頃）のものと目される化粧板（カイロ美術館、オックスフォード大所蔵）には、地上に生棲する動植物を育むかのように、太陽を示す円形が板の中央部に彫られている。これがのちに、頭上に日輪を戴く隼の像で表わされるレー神の表象となり、同じくハトホル神の姿に取り込まれる。またレー神とは異なったアトン（アテン）神、すなわち日輪そのものとして崇拝された神の表象ともなる。

レー神崇拝の具体的な象徴は、第五王朝（紀元前2494年頃～同2345年頃）のファラオが建造した「太陽神殿」に表われた。その代表がオベリスクで、その頂からレー神が生まれ、初めて宇宙創造を行なったといわれる。ファラオは、そのレー神の二本のオベリスクに所属するとされたので、一対のオベリスクが神殿の塔門（ピュロン）の前に立てられた。

新王国時代に入ってからレー神はオシリス神と結ばれ、「地界の支配者」ともなり、日々、死と生を繰り返えし、死を通過して復活し、新しい生命を獲得する。これは、毎日、太陽が東から昇り、西に沈んで闇を迎え、翌朝その闇を破って再び東から昇るという動きを神格化したものである。

アメン神の崇拝も古くから知られており、古王国第五王朝の『ピラミッド・

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

テキスト』に、「王は天に昇り、ゲブ神（大地の神）の子としてアメン神の玉座に坐る」と記されており、ファラオがのちに宇宙的王権をも獲得することを予見させているが、レー神と結ばれてアメン・レー神となり、太陽神の象徴である「太陽の円盤」で表わされるようになった。そしてとくに、新王国第十八王朝（紀元前1550年頃～同1299年頃）の軍事国家のファラオたちに崇められ、国家神的性格を与えられて大神殿が奉納される。その中心がカルナックのアメン大神殿で、アメン神が「原初の神」として宇宙を創造する場所とされたのであった。歴代ファラオの厚い信仰と寄進によって、この大神殿の神官団が強大な力を持つようになったため、アケナテン王（アメンヘテプ四世）による宗教改革が行われ、ほぼ15年にわたる短期間ながら王都はテーベに移されるが、少年王ツタンカーメン在位中に、この宗教改革は潰されることになる。

太陽神レーとアメンを信奉したファラオの権力争いは、このとき、最も顕著に示されたが、太陽信仰が、常にファラオの王権を支える基盤であったことは、古代エジプトの国家体制を見る上で重要な点である。

二、太陽信仰の異なる表象

かつて土居光知氏は、英文学を学んでいた学生の頃から、ホメーロスやギリシア神話に関心を抱き、以来、クレタ、小アジア、シリア、バビロニア、シュメールと神話や伝説をたどってみた、と記している（土居光知『古代伝説と文学』）。

曰く、「古代伝説や文学を採集するのみでなく、比較研究により、それらの伝説や文学の間に影響や共通点を見いだそうとつとめた。第一の共通点は熱と光と水とを与える太陽に感謝しつつ、その太陽が夕に西山に没し、朝に東山に復活し、春夏には北上して地上の生物を生育し、秋冬には南下して草木凋落の時となることを見て、人間の生死復活の理を考え、生命の木のような象徴をつくったこと、太陽が東の山に上る位置から種蒔きや耕作の時を定め、太陽のごとく万物に恵みを与え、人間のために働く英雄を崇拝し、この英雄の遭難や旅行や誉れを伝える物語を各国で生ぜしめたことなどである。」（同書）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

これは太陽信仰が人間の生活すべての根底にあることを要約して語っており、政治・経済・社会・文化・宗教・科学などいずれも太陽と人間との関わりで究明してみるならば、多くの謎解きも容易であることを教えてくれる。

また土居氏は、古代エジプト人の想像力は物体と精神とを引き離すことができず、動物の頭と人間を接合したような神々の形象を崇拝したのに対し、シュメール人は人間を通じて神を見たので、初めから日神に人間的な形象を与え、さらにクレタ人は金石に刻んだ画象によって情緒をも表現することができた、といい、そのような詩的心象として、『万葉集』の抒情詩を連想させるものがある、と断じた。そして、「このような相似や共鳴は人間の社会生活進展の段階を等しゅうしていたことによるものであろうか」と設問し、日本を例にして「アジア大陸で発生した文化の伝来が、わが国の古代人に与えた刺激は第一に模倣を、第二に心のめざめをうながし、日本人の社会的生活の進展が、多少共通するところのある伝説や詩歌を生み出したのであろう」と、自ら答えている。このことは、言うまでもなく日本に限らず、古代エジプトや古代ギリシア、或いはメソポタミア文明などの相互の影響と、人類の自発的な発展とがどう関わり合っているか、ということを見る上でも同じであると考えるべきだろう。従って、エジプトのナイル河流域で生み出された太陽信仰の原形が、そのかたちを変えてクレタやミュケーナイ、或いは古代ギリシアやカルタゴ（フェニキア人）またはヒッタイトやアッシリア、古代ペルシアなどへ伝播した過程を辿り、これら各地の宗教、政治、社会にどのように影響し、各地域の原初的宗教教義に結ばれてさまざまな表われ方をしているか、ということを究明することで比較文明論による多くの示唆が得られる。

この太陽信仰（崇拝）がキリスト教において、どう採り入れられているか、数例をみるだけでこのことがよく理解される。

『旧約聖書』を見ると、神は烈しい熱気や火炎、光そのもの或いは光に満ちた雲を伴って現われる。例えば、モーセがホレブ山で出会った神は、燃える薮の中から現われ、「わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」とモーセに告げる（「出エジプト記」）。そしてファラオのところへ行き、「わたし（＝ヘブライ人の神）の民を去らせ、わたしに仕えさせ」るようにせよ、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

と命ずる。その命に従い、モーゼがエジプトを出ようとファラオのもとを退出すると、それをファラオが拒み、さまざまな弾圧、迫害を加えた。しかし、ファラオの初子をはじめエジプト全土の家畜の初子までも死んで叫びがおこると神は告げる。そのお告げどおり、エジプト全土から初子が抹殺されたため、怖れおののいたファラオは、モーセに従ってイスラエル人がエジプトから去ることを許した。かくて430年もの間エジプトで奴隷となっていたイスラエル人60万人がナイル河畔から退去したのである。この出エジプトに当り、神は人々に先立って進み、「昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた」という（「出エジプト記」）。

モーセがシナイ山に着き、そこで神から十戒を授かったときにも、主（＝神）が火の中を山の上に降りてこられたので、山全体が燃えさかって煙につつまれ、山もまた震えおののいた、という。

『旧約』に記されたモーセの出エジプトは、エジプト第十九王朝のラメセス二世（紀元前1279年頃～同1213年頃）治下、エジプトに居住したイスラエル民族がエジプトの圧政から逃れ、モーセが人々をアラビアの砂漠に導き、ヤハヴェの神（ヘブライ人の神）を礼拝させた、という史実に基づく（ラメセス二世治下か否か、異説がある）。ラメセス二世は戦略家、征服者として知られるファラオで、北のパレスティナ、南のエティオピアを征服し、ヒッタイトと戦って勝利を収めたが、新興勢力のアッシリアとは和約を結んでエジプトの版図を護り、ナイル・デルタ東方のペルシウム、ヘリオポリス、タニスを結ぶ防壁を築き、テーベに壮大な建造物をつくった。「ヘリオポリス神学」に見るように、創造神こそ太陽神であり、国家神アメン・レーへの信奉を強化して、ヤハヴェの神を信奉したイスラエル人を弾圧したものと考えられる。同じ太陽信仰に基づいたものでありながら、アメン・レーとヤハヴェの表われ方は、全く異なるものであったのである。

土居氏が指摘するように、神々の形象を崇拝したエジプト人とは異なり、メソポタミア地域とその周辺の人々（シュメール人をはじめとする）は、人間を通じて神を見ており、太陽神を人間の姿で把らえていたのである。更に『旧約』の「エゼキエル書」では、預言者エゼキエルが見た神は、「人の有様

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

のような姿をし、腰から下は火であり、腰から上は琥珀金の輝きのように光輝に満ちた有様をしていた。」また「イザヤ書」には、「闇の中を歩む民（＝ユダヤの民）は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」と記され、神が光、すなわち太陽であることを示唆している（『旧約聖書』）。

太陽崇拝と人間との関わりは、『旧約』で見る限り、エジプトにおける太陽信仰とは性格を異にしており、神と人間が直結してその命を受けたり教えを授かったりしている。３千年にわたった古代エジプトの歴史の中でも、第十八王朝のアメンヘテプ四世は、前述のようにレー神とは異なるアテン神（太陽そのもの）を唯一絶対神として信奉し、宗教改革を断行して自らアケナテン王（アテン神信奉者）と称し、都もテーベからテル・エル・アマルナに移したが、次王ツタンカーメンのアメン神信仰でこの宗教改革はわずか15年で挫折した。しかしアマルナ美術として今日、出土品で見ることのできる彫刻などは生々しい人間味を滲ませているのである（例えば、有名な「ネフェルティティ（アケナテン王妃）像」、ベルリン美術館蔵）。

アマルナのこうした人間臭豊かな人物像をみるならば、太陽そのものとしてのアテン神を崇拝したアケナテン王の宗教改革がどのような性格をもっていたかということが解る。ずっと後になるが、紀元後十三世紀初頭、イタリアのアッシジで貧者を友とする愛と奉仕の宗教運動を展開した聖フランチェスコが、〝万物は神がつくり、その神意の表われ〟として美を是認した『太陽賛歌（万物礼賛）』は、このアテン神の信仰に通ずるものである。その思想がルネサンスの大きな原動力になったとされるのも、そこに「太陽と人間」との関わりが明らかに看取される自然主義が鮮やかな映像を生み出しているからであろう。

三、古代社会を侵蝕し吸収したキリスト教

イエスが十字架にかけられてのち、ローマ帝国に滲透していったキリスト教に対する迫害は、紀元64年、皇帝ネロによってローマ大火の責めを受けた教徒の殉死にはじまる。このときペテロとパウロが殉教したといわれるが、以後、迫害にめげずキリスト教は帝国内に急速に拡がっていく。

人間の姿をした神による、人間の、唯一にして最後の罪の贖いというのは、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

一般の密儀信仰が主張する救いの考えよりも遙かに力強い概念であり、ヘブライ人の予言ののち数世紀にして罪の贖い＝つまり救いのあかしが行われた（キリストの磔刑）ことは、まさに真の「救世主」の出現を告げるものであった。予言がみごとに実現されたのである。

キリスト教は、人間の人間に対する愛、および至るところに生まれたキリスト者の共同体の結合を説く。しかも、それは奴隷・自由民を問わず、男や女や子供にも、直接に訴えるものであった。来世についても漠然とした抽象的な言葉で表わされるものではなく、肉体の甦りを絶対に約束するかのようであった。とくに初期の信者たちは、多くは貧民であり、市民権を与えられることのない底辺の社会層の人々であったから、救世主キリストの再臨と地上におけるキリストの王国の実現が、極めて近い将来に起るという信仰に強烈に引き込まれたのである。それ故に、男も女も殉教を何らためらうことも怖れることもなかった。来世で自分たちを待っている絶対的な確かさに、その身を委ねたのである。

いうまでもなく、ローマ帝政期には、多くの宗教が民衆の間に混在しており、ユダヤ教をはじめとして、古くからアーリア人の間で信奉され、この頃、ペルシアからバビロニアを経てローマに伝来したミトラ教などが各地に根をおろしていた。中でも、太陽・光明・豊饒・知恵を神格としたミトラ神は、とくに東方の西アジアに赴いた戦士に信奉され、ローマの軍人階級に、その信仰が根強く這入り込んでいたのである。しかし、キリスト教はそうした軍人層にも滲透し、キリスト教への改宗者が相次いだ。

ローマ皇帝ディオクレティアヌス帝に愛された近衛将校セバスティアヌスが、密かにキリスト教徒となり、殉教に赴く信者を励ましたため杭に繋がれ矢を射られて殉教したが、奇蹟で蘇生し、帝のもとに赴いて福音を説いたため打ち殺されたのは、象徴的なキリスト教徒の殉教を物語っている。

ユダヤ教徒と同じくキリスト教徒も、ローマ皇帝への礼拝を拒否した。ローマ政府は、キリスト教徒として告発された人物に、キリスト教の信仰をやめさせ、皇帝への礼拝を遵守させようとしたのである。キリスト教徒への弾圧が最も激しかったのはディオクレティアヌス帝治下のことであったが、やがて迫害を正当化する諸勅令が撤回され、ミルウィウスで天空に十字架を

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

仰ぎ、正帝と自称したマクセンティウスを破って帝位に即いたコンスタンティヌス（大帝）は、紀元337年、臨終の床で洗礼を受けた。かくてキリスト教はローマ皇帝をも信服させたのである。

その後、異教との確執が続いたものの、皇帝テオドシウスの治世に至り、キリスト教は国教として承認され、異教が公的には抑圧されるようになる。

しかし、異教は一朝一夕に滅びることはなく、その多くはキリスト教化されて残ることになった。例えば古くからの民間祭儀メガレシア（大地女神の祭）は名を失ったが、ゲームとして残り、またロビガリアという古ローマの祭りで行われていた、犠牲を捧げて収穫に神の恵みが与えられるようカッシウス街道をローマから歩むという行事も、同じ日に同じ道での聖マルコ連祷の儀に継承されたのだった。とくに重要なことは、元来シリアの神であった太陽神（ソルニインウィクトゥス）の誕生日12月25日には、創造主・太陽神の誕生日として紀元四世紀からキリスト教の教会で儀式が行なわれ、この日をキリスト降誕の日とした点である。またクリスマスにプレゼントを交換し、紙の帽子をかぶるという習俗も、実はサテュロスを祝う古代ローマ人のそれを、キリスト教の一行事として組み込んだものであった（ボールスドン「宗教の闘争の場としてのローマ」。同編『ローマ人』所収）。

四、王権と富を護る太陽神

文明発祥の地の一つとされるメソポタミアでは、凡そ紀元前１万５千年頃から人々が定住しはじめ、やがて家族集団が出来、それから前９千年頃から村落が出現した（フランクフォート『古代オリエント文明の誕生』他）。

定住社会は前6500年頃に出来たといわれ、その遺跡に因んでメソポタミアではこの時代が通常ウバイド文化と呼ばれるが、この期の定住社会に共通するものは地母神を軸に営まれた祭儀が行われたことである。アナトリア（現トルコ）のチャタル・フユック（前6500～5500年頃）なども新石器時代に出現した共同体定住社会の構造を示している(James Mellaart; Çatal Hüyük)。

定住社会を特徴づけるのは、先ず共同墓地の存在であり、守護神を祀る神殿の創建である。メソポタミアのスーサにある共同墓地（ネクロポリス）は凡そ前4200年頃のものと考えられているが、そこから発見された単純な形を

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

した銅器をみると、比較的平等だったそれまでの社会に階級が芽生えはじめたことがわかる。また同じくメソポタミアのエリドゥでは日干し煉瓦の大建造物の存在が確認されており、その社会の長老がこれを庇護し、共同体の集合施設として使用されていたことをうかがわせる。こうした巨大建築を造るには、職人の集団がこれを担い、工事を指揮する人物がいなければならない。資材の調達搬入はもとより、作業に従事する人々の住まいや食糧の確保も必要であり、必然的に、そこには都市機能を持つにいたる社会がつくられていくことになる。これが都市国家の原初的誕生であり、内部において階級社会が形成され、外部に対してはその大建造物を中心として蓄えられていく財宝を略奪から守るという性格を持ち、城壁を構えるという形が生まれる。

しかしアナトリアのチャタル・フユックなどでは地上に城壁を設けることをせず、地下深く集落を形成し、外敵の侵入に備えて通路の各所に防御石を置くという構造をつくり出した。アナトリア（トルコ）では今日なお、類似した地下住居の痕跡を見出すことができる。

こうして形成されてきた古代社会はやがて都市国家を各地に生み、それら相互の抗争から強者が弱者を支配・吸収して、都市国家の連合体（例えばイタリア半島先住のエトルリアの十二都市連合（ドデカポリス））を形成したり、強大な権力を持つに至る王（族長や司祭長などから出てくる）が覇権の及ぶ限りの国家を形成する。メソポタミア地方に相次いで盛衰の轍を残したシュメール、アッシリア、バビロニア、ミタンニなどの王国やペルシアのアケメネス、シリアのセレウコス、時代を降ってササン朝ペルシア等々が数えられる。更にアナトリアや中央アジアへ目を転ずればヒッタイト、ウラルトゥなどの盛衰が見出されるのである。

この歩みをナイル河畔を中心としてみるならば、紀元前６千年頃に農耕・牧畜がはじまり、社会の共同体からやがて前３千年頃、ナルメル（メネス）王が政権をたち上げ、上エジプト、下エジプトを統一して、メンフィスに首都を置いた。以後、サッカラやギザのピラミッドをつくり出した古王国時代を迎え、王権が代わった中王国時代末、ヒクソス（古代オリエントの遊牧民）の侵入を受けてその支配下にあった凡そ250年間を除き、新王国時代まで一貫して王権を守り、国家を維持した。ローマに征服される紀元前30年まで実

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

に3000年にわたる王国である。

その強固な王権を支え、国家を堅持してきた原動力こそ、太陽信仰を組織化し、守護神としての太陽神レーがファラオに結ばれていたことによるものであった。アマルナ時代にアケナテン王が信奉したアテン神も太陽神そのものであり、古代エジプトの強固な国家こそ人類史上、太陽崇拝を組織化して、それによって体制を維持した最も典型的な国であったといえよう。

五、古代地中海周辺の城塞・宮殿

〝おもえば、はや10年のむかし、正義を楯に立ちあがる　背たかき大王メネラーオスと、つづくアガメムノーン王、ゼウスから二つの王座と二本の王杖という名誉の重いくびきをかけられたアトレウス家の二人の殿は、一千隻の船にもあまるアルゴスの市民らに支度を命じ、戦場の手助けとしてこの地から出陣させた。

喉も裂けよと戦神アレースをよぶ二人の姿は、嘆きの猛禽かともみえるばかり…〟

（久保正彰訳）

古代ギリシアの悲劇『アガメムノーン』（アイスキュロス作）冒頭、コロス（合唱隊）は、トロイア遠征の総大将アガメムノーン王をこう語り告げる。メネラーオスは伝説ではスパルタ王とされているが、この劇に見る限り、二人の王がアルゴス地方を共同で統治していたかのように思われるものの、悲劇はアガメムノーンに降りかかった。戦争に勝利をおさめた凱旋を祝う宮殿内で、留守中に従兄弟アイギストスと通じた妃クリュタイメーストラーの刃によってアガメムノーンは無残な最期を遂げる。

その直前、捕われの身となってここへ連行されたトロイアの王女カッサンドラーは、アガメムノーンがクリュタイメーストラーとともに館に入っていくのに従わず、自分自身とアガメムノーン王の死と、オレステース（アガメムノーンとクリュタイメーストラーの子）の手による母親殺害について予言する。そして予言者の装いを投げ捨て、死を決意して館のなかへ飛び込むように消えていく。

この悲劇の舞台となったとされるミュケーナイの宮殿は、ギリシア本土の

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

南端ペロポンネーソス半島アルゴリス地方にあったアトレウス家の居城で、アルゴスやピュロスなどの軍事国家とならび、ティリュンスやピュロスの館と同じく、インド系ゲルマン民族（ホメーロスのいうアカイア人、つまりギリシア人の祖先）が築いた城塞宮殿である。

ハインリヒ・シュリーマンがアナトリア（トルコ）の西岸ヒッサルリクの丘を発掘してホメーロスのいうトロイアを見出したのち、この地でティリュンスなどとともに明らかにした「イーリアス」「オデュッセイア」に関わる遺跡であり、興味あるその構造も凡そ解ってきている。

トロイア遠征に際して一千隻もの船が調達し得たのは、クレタ島を支配下に置き、その船と船乗りを遠征軍の搬送に利用したからだといわれ、トロイア戦争の時期と推定されている紀元前1300年頃にはミュケーナイはクレタ文化を取り入れて独自の都市国家と文化をつくり上げていた。

クレタ島は紀元前2600年頃から王国として次第にその文化を築き、前２千年紀に入って急速に繁栄する。おそらく、トロイアやキュクラデスの文化が停滞衰微しつつあったのに対し、エーゲ海域（東地中海）の覇権を握り、海上交易によって莫大な富を得、島内にクノッソス、マリア、ファイストス、ハギア＝トリアダなどにそれぞれ宏壮な宮殿を造り、それらの宮殿の周りに都市が形成されたものと考えられる。前1700年頃には地震で殆どの宮殿が破壊されてしまうが、すぐに再建され、以前にも増して立派な宮殿や都市が築かれた。この新宮殿の時代（前1700年～同1400年頃）は年代的にはミノア文化の中期から後期と見做され、最盛期に当る。しかし前1400年頃サントリーニ（テラ島）の噴火に起因する地震や津波でこれらの新宮殿が破壊され、ほぼ時を同じくしてクレタ全島がミュケーナイ人によって占領される。トロイア戦争は、クレタ島を支配してその富を手にしたミュケーナイがアナトリア地方へ勢力を拡張しようとして起こった戦いであった、と考えられるのである。

かくて戦いに臨んだミュケーナイは軍神マルスを仰ぐようになった。

クレタ島の宮殿が共通してもっている特徴は、外敵に対する防備施設が殆どないことである。いずれも矩形の中庭を中心にして、住居、祭礼儀式の間、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

食糧を貯える倉庫などから成っており、切石を二層、三層に積んだ構造を示している（クノッソスは谷間(あい)に傾斜した土地を利用して一部では四層五層ともなっている）。採光を考えた階段室や行き届いた給排水施設も整い、どの部屋も開放的で明るい。多くの壁には、自然の動植物をのびのびとした筆遣いと鮮やかな色彩で表わしたフレスコ画が描かれた。〝パリジェンヌ〟と渾名される優雅な婦人像や祭儀に関わる日常生活の生き生きした人々の姿や動物、或いは美しい草花である。エジプトのアマルナ時代に自然主義的な絵や彫刻が造られたことと規を一にするものであろう。燦々と輝く太陽のもと、クレタの人々は、豊かな自然に囲まれた平和な生活を享受していたのである。

しかしクレタの影響が見られるミュケーナイの城塞宮殿は、基本構造を全く異にしている。

クレタ文化との繋がりを指摘されているのは、ミュケーナイの獅子門の(まぐさ)上に設けられた柱の形が、クノッソス宮殿内の柱のように上方に太くなっ楣いること、また出土した黄金製の「ヴァフィオのコップ」や、短剣の鞘に施された動物や魚貝類の装飾などで、金細工の技術や海洋生物の表現がクレタとミュケーナイの結びつきを示していることなどからである（いずれもギリシアのアテネ国立博物館およびクレタのヘラクリオン国立博物館蔵）。

基本構造を全く異にしているクレタの宮殿とミュケーナイの城塞宮殿との違いは先ず方位にある。前者が凡そ平地につくられている（マリアやハギア＝トリアダは平野にあり、クノッソスも緩やかな丘陵と谷間を利用している）のに対し、後者は周辺から攻撃しにくい山腹の丘を利用し、城壁を設けてつくられており、明らかに外敵に備えた構造をもつ。前十二世紀末にドーリス人が北方から侵入してミュケーナイが消滅したことでも明らかだが、ユーラシア大陸と地続きのペロポンネーソス半島は外敵の侵攻にさらされる。他方、クレタ島は、海からの外敵の侵入を経験したことがなく、独自の文化を千五百年にもわたって築き、保持することができた。従って、クレタでは明るい太陽の光を十分に受け入れられる構造の建築を、自由につくることが可能であった。クノッソス宮殿が南北方位をとっているのは、太陽の日指しを自由に取り入れ、交易の港（現在のヘラクリオン）からは財宝や食糧を運んでくる客人たちを、殆ど警戒なしに（とはいえ、宮殿入口には監視所

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

や検問所が設けられていた）迎え入れることができたからである（港は宮殿の北東に位置している）。

しかしミュケーナイは、海からかなり離れており、その港からの距離は15キロ近い。自由な交易による富を直かに運び入れられるクレタの宮殿とは異なって、貯えた財宝や王たちを外敵から守らなければならない構造を持たざるを得なかったのであり、そのため城塞宮殿の方位や構造の基本的必要条件が検討され、最適な地形が探索されたと考えられる。

彼らアカイア人は、地形や方位をどのように把らえ、検討し、築城を決定したのであろうか。

東方の西アジア系の血を引くインド・ゲルマン族は極めて合理的な思考力を持つ人種であり、理詰めの性行を持つといわれる。城塞を兼ねた宮殿の設営に当っては、先ず東から昇って西に沈む太陽の運行を基本に考え、これに見合った東西に長い丘に目をつけたのであろう。

エジプトにおいてもメソポタミア地方においても国家形成の基本が太陽信仰に置かれていたことを、東方から陸伝いにペロポンネーソスまで移住してきたアカイア人が知らなかった筈はない。彼らがこの地に居住し、集落をつくり、都市国家を形成したのは紀元前十六世紀頃からだろうと推定されている。彼らが国家としての武力を蓄え、周辺の富を奪って繁栄したのは五百年足らずで、その文明が衰退し、北方からこの地にドーリス人が侵入してくる紀元前八世紀頃までを歴史上暗黒時代と称する。ホメーロスの壮大な叙事詩は、前八世紀半ば頃の作といわれ、それより四百年余り昔の歴史的事実に基づいて書かれたとされているが、その歴史的事実が刻まれているのはこのミュケーナイの城塞宮殿とその周辺の遺跡である。トロイア戦争の相手国トロイアがアナトリアで版図を拡げ、繁栄を謳歌していたときと時代を同じくする。

そのトロイアは紀元前三千年紀中頃から集落を形成し、早くも前2400年頃から同2200年頃、ここに壮大な宮殿を築いたもののやがて衰退し、のちにこの地に進出したアカイア人によって再び豪壮な宮殿が築かれたと考えられている（シュリーマンの協力者デルプフェルトはこの宮殿が在った時期をミュケーナイ文化の時代と見做し、ホメーロスの叙事詩にみる「トロイア」とし

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ている)。

このトロイアの城塞都市もエーゲ海に面した海辺より3キロ足らずのところに位置し、そこから舟が遡上できるアスマル川の河畔に在る。東地中海の交易による富を得て繁栄した都市国家トロイアは、地中海周辺の各地に在った城塞都市と同様の地理的条件を有していたのである。

六、ミュケーナイ城塞宮殿と首里城

エジプトの王家の谷にあるラメセス六世（紀元前1140年頃）第9号墓天井壁画には、天空の女神ヌートが、陽光と大気の神シュウに支えられ、指先と爪先(つまさき)を大地の神ゲブの東西の地平線に下ろしている姿で描かれている。その体には星が散りばめられ、太陽神レーが聖なる船に乗って昼はヌートの上を東から西に進み、夜はその体内または地下を西から東に進むという考えに基づく表現である。天空の女神と太陽神の昼夜の航海を示すもので、「死者の書」には「昼の書」と「夜の書」が記されており、人間の誕生と死が輪廻(りんね)することを語っている。

住居の造成地を考える上で、この輪廻の思想は重要な要素となっており、東洋でもこれが生死や方位の基本的な把らえ方の原点を成す。仏教でいう「西方浄土」は、〝死〟を西に位置するものとしてその先に〝浄土〟を見ているのである。またキリスト教にあって〝神〟を東に仰ぐ聖堂の構造が基本になっているのも、原点は同じであると考えられる。

ミュケーナイの城塞は東西386メートル、南北272メートルの城壁に囲まれた構造をもち、海抜約280メートルの岩丘上に建つ。正門は北西に位置する「獅子門」で、ここから城内に入るとすぐ右手に円形墓地を見て、左手へ曲がり、100メートルほどでメガロン（ミュケーナイ時代の特徴であった住宅および宮殿をいい、この部分がのちにギリシア神殿となっていく）の前に出る。ここには宮殿の前庭があった。メガロンの後方には、「列柱の間」と称される住居跡があり、王族や神官、仕官たちが住まっていたものと考えられる。一番奥つまり東端には財宝や食糧等の貯蔵庫、貯水槽があったと推定され、秘密の上水路や排水路なども設けられていたとみられる。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

六箇の黄金マスクが発見された円形墓は城郭内真西に在る。これは太陽が沈む西方を死後の世界と見る方位の考えに従ったものであり、のちにここが手狭になったため、城外西方に墓所を設け、死者たちを埋葬した。代表的な「アトレウスの宝庫」(アガメムノーンの墓とされている)は羨道入口を東にして城塞南西の位置に置かれており、クリュタイメーストラーの墓(と称されている)とアイギストスの墓は、獅子門近く、いずれも羨道入口を南に向けて設けられている。両墓の南には、油商人や武具職人の家などが見出されるが、いずれの墓も誰のものであったかは確証がない。

トロイア戦争の総大将として凱旋したアガメムノーンが妃クリュタイメーストラーとその情夫アイギストスによって殺害されたのは、このミュケーナイ城塞宮殿のメガロンで催された宴会の席上においてであった。

現在に残るミュケーナイの城塞宮殿跡は、紀元前十三世紀頃に再建されたものといわれているが、紀元後1400年代に創建された首里城と極めて似た構造をもっていることに驚く。

城塞はどちらも東西に長く、いずれも390〜400メートル。また南北も凡そ270メートル。俯瞰図では両者ともに南側に突出した湾曲を示す地形で、正門が北西端に設置されている。ミュケーナイの獅子門と同じ場所に首里城では歓会門が設けられており、冊封使はここから漏刻門、広福門を経て奉神門から正殿に向かう。ミュケーナイの円形墓がある城内西端は、首里城の西のアザナに当る。「アガメムノーン」劇に描かれた場景を、假りに首里城に置き換えてみるならば、アガメムノーンとクリュタイメーストラーが正殿へ入るのをみて〝殺害〟が行われることを予言したトロイアの王女カッサンドラーは、奉神門で歩みをとめ、この予言を口走ったことになる。ミュケーナイでは円形墓を右手にして左折し、メガロンの前庭に向かう門のある場所であったろう。カッサンドラーは城塞西端に位置する墓所の傍らで惨劇による〝死〟の姿を予見したに違いない。首里城西のアザナには、王墓が玉陵に移設されるまで王族の墓所があったのではないか、と推定することもできるだろう。

(鎌倉芳太郎氏は、西ノアザナ東南側下文字瓦層と京ノ内西北側下〔西と東〕の発掘調査を試み、宣徳頃の景徳鎮からの優秀な染附が出たことに驚きを示

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

した。またこの西のアザナは永楽16年〔西暦1418年〕より宣徳２年〔同1427年〕に至る頃に埋立てられたところだと推定している（鎌倉芳太郎「南海古陶瓷調査報告書－琉球発掘報告」、『セレベス・沖縄発掘古陶瓷』〔1937　初版〕収録）。

ミュケーナイ城塞宮殿と首里城の類似は上記にとどまらず、城壁の形姿・構造もよく似ていることに気付く。両者は地理的にも大きく距り、築城年代からいっても三千年にも及ぶ距りがある。しかもシュリーマンがミュケーナイを発掘したのは1876年のことで、首里城の創建者がその存在を知る、などということは全く有り得ない。

この類似の究明には詳細な調査研究が必要であるが、ここではその研究の枠組みとなる原則的な視点のみを記しておくことにする。

1、地形－交易を行なう港を望見できる距離にある丘上に設けられている。
2、方位は東西を示し、城郭入口の正門は北西端に置かれている。
3、城域の広さをほぼ同じくしており、城壁の形姿も優雅な曲線を双方とも示している。
4、祭祀や国家的諸行事を行なう建造物（メガロンまたは正殿）を城塞宮殿の中央に置いている。
5、その建造物の後方（ともに東側）に王の住いを置き、財宝保管庫や食料貯蔵倉、貯水槽など、王権と生命の維持を支える最も重要な施設を配置している。
6、ミュケーナイでは山腹からの水路によって水を貯え、首里では城壁で囲い、雨を貯水する構造を城自体に持たせている。
7、東側は生命を育み、西側は死を迎える。いずれも太陽の運行に従い、それを城郭の基本的方位にしている。
8、城内にあった墓所（西のアザナをそう考えるとして）をのちには城外に移し、墓所（ネクロポリス）を生者が住む宮殿から離れた西側に置いた。首里城では玉陵に当る。エジプトの例でいえば〝死者〟は西に住む。

こうしてみると首里城の独自性がはっきりとしてくるだろう。元や明の大

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

都に学んだものではなく、琉球古来の太陽信仰に基づいて方位を決め、地形を利して築城されたものだということは明らかである。いうまでもなく、例えば風水説などを聴取して城郭内諸施設の配置を決めていることも当然考えられるが、方位の基本は琉球古来の太陽信仰に拠ったものであると理解すべきであろう。奇しくも、それが3千年も前につくられたミュケーナイの城塞宮殿と同じ構造を示すものとなったのである。

ペロポンネーソス半島は、今でこそ掘削されたコリント運河でバルカン半島先端アッティカと切り離されたかたちとなっているが、本来は陸続きで、大陸住民の南下進出には何の支障もない。紀元前2千年頃から各地に集落を持つにいたった部族がそれぞれ富を貯え、互いの抗争に備えて城塞を築き、都市国家を形成した。中でもペロポンネーソス地域の富と権力を掌握したスパルタと、クレタ島を支配して強固な地盤を持って繁栄したミュケーナイが他を圧していたと思われるが、地域内での抗争は絶えなかった。しかしトロイア戦争がそうした域内相互の争いを収斂させ、ギリシア世界を各都市国家に自覚させるきっかけをつくったと推定される（ホメーロスがこれを謳いあげたのである）。

この歴史的な動きは琉球が統一国家を形成するまでの経過と軌を一にする。各地に共同体が生まれ、その首長がそれぞれのリーダーとなって互いに拮抗し、城（グシク）を築いて他の共同体と争い、勢力を強め、支配地域を拡大し、中国への入貢、交易を競って全島の統一をはかった。尚巴志による琉球王国の創建は十五世紀初めの1429年。南方交易で富を貯え、国家体制を強化したものの反乱で崩壊し、金丸によって築かれた第二尚氏の王政が琉球王国の繁栄をもたらすことになる。ペロポンネーソス半島における都市国家成立の経過と同じである。首里王朝もミュケーナイのように、内外から自らを守る城塞宮殿を強固なものに改めなければならない。かくて明から多くの石工（万里の長城がこの頃完成して、明では石工の仕事がなくなった）を呼び、城壁の補修・強化に努めたものと考えられる。長城は地形を生かした城壁で、完成時は延長2400キロに及んだ。首里城の城壁が地形を巧みに生かして造成されているのは、明の石工たちの技術に負うところが大きかったと思

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

われる。ミュケーナイの城塞も、クレタの宮殿造りに携わった職人たちに負うところがあったと考えられるのも無理はない。獅子門の楣上の石柱がクノッソス宮殿の柱を模したものであることからも、このことが推定される。

結び

陽光の輝く、明るい午前にランタンの灯をともし、〝神はどこだ！　神はどこだ！〟と叫びつづける男は、決して狂人ではない筈である。悪魔に魅入られて殺し合う戦争は人間社会における暗黒の闇で、流される血と阿鼻叫喚をこの世に見てはならない。しかし現実に血生臭い争いが起こる限り、人はおのが身を守ろうとする。城壁でその身を囲めるのは権力者だけであるが、外に対していかに守りを固めてもそれは内なる崩壊を防ぐことは出来ない。ミュケーナイの没落は城壁では防ぎ得なかった。

東に昇り西に沈みゆく太陽を仰いで平和への祈りを捧げ、民を富ませ、人の和を育むことこそ王たるものの使命である。琉球王が理想としたこの為政は外部からの侵略者によって破壊され、四百年に及ぶ王国は消滅した。しかし、遙か昔から継承されてきた民の祈りまでは抹殺できなかった。神々へのその祈りとともに再現された首里城が、沖縄の人々の心の支えとなって永遠に残されることは、誰しもが等しく願うことだと思う。

（拙稿「首里城正殿はなぜ西向きであるのか――太陽信仰と琉球王国の成立（首里城と『おもろさうし』）」沖縄学研究所紀要『沖縄学』第５号収録参照）

参考文献

エジプト関係

Kurt Lange & Max Hirmer ; Egypt, 1956, Phaidon

Amédée Ozenfant ; Encyclopédie Photographique de I'Art, Tome 1 1936 Éditions 〝TEL〟

Christiane Desroches-Noblecourt ; Tutankhamen, 1963, New York Graphic Society

Translated by Raymond O. Faulkner ; Book of the Dead, 1972, British Museum Publications

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

プルタルコス『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』 1996、岩波書店
鈴木八司『ナイルに沈む歴史』 1970、岩波書店
鈴木八司監修『エジプト』 1996、新潮社
J.P.ローエル『ピラミッド学入門』 1966、法政大学出版局
オット・ノイバート『王家の谷』 1971、法政大学出版局
ジョン・H.テーラー『ミイラ解体－古代エジプトを知る』 1999、学芸書林

メソポタミア関係他
André Parrot ; Sumer, 1960, Éditions Gallimard
André Parrot ; Assur, 1961, Éditions Gallimard
Kurt Bittel ; Les Hittites, 1976, Éditions Gallimard
Roman Ghirshman ; Perse, 1963, Éditions Gallimard
Samuel Noah Kramer ; In the World of Sumer, 1986, Wayne State University Press
（邦訳：『シュメールの世界に生きて』 1989、岩波書店）
月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』 1996、岩波書店
フランクフォート『古代オリエント文明の誕生』 1962、岩波書店
江上波夫『美術の誕生』 1965、東京大学出版会
関根正雄『古代イスラエル研究』 1969、岩波書店
U. Bahadir Alkim ; Anatolia, 1970, Nagel Publishers
James Mellaart ; Çatal Hüyük, 1967, Thames and Hudson
Franz Cumont ; The Mysteries of Mithra, 1956, Dover Publications

古代ギリシア関係
Pierre Demargne ; Naissance de I′ Art Grec, 1964, Éditions Gallimard
Stylianos Alexiou ; Minoan Civilization, 1969, Spyros Alexiou Sons
J.M. Christoforakis ; Crete, 1961, Architectoniki Publishing Co.
Nikolas Platon ; Kreta, 1968, Wilhelm Heyne Verlag
Giampiera Arrigoni ; Le Donne in Grecia, 1985, Editori Laterza

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

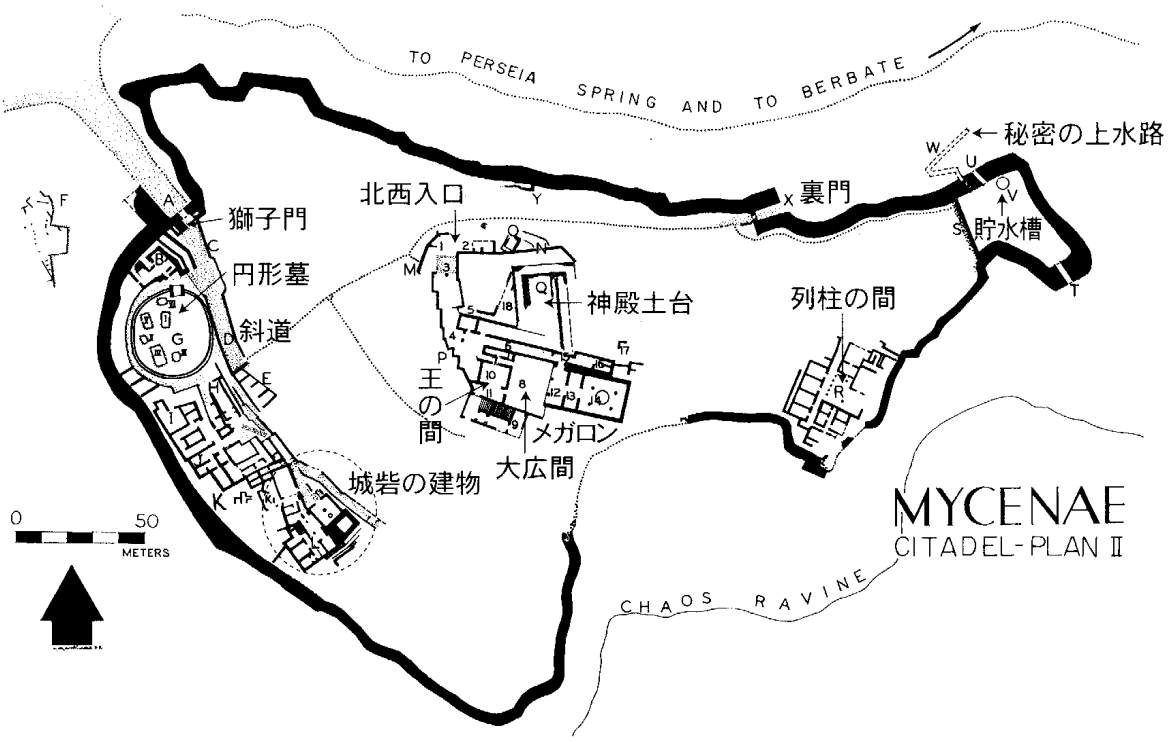
Spyros Meletzis & Helen Papadakis ; Corinth, Mycenae Tiryns Nauplion, 1981, Verlag Schnell
J.A. Papapostolou ; Crete, 1981, Clio Editions
George E. Mylonas ; Mycenae : its ruins and its history, 1970, Athens
Helen Wace ; Mycenae, 1969, Athens
Wilhelm Dörpfeld ; Heimkehr des Odysseus, 1925, München

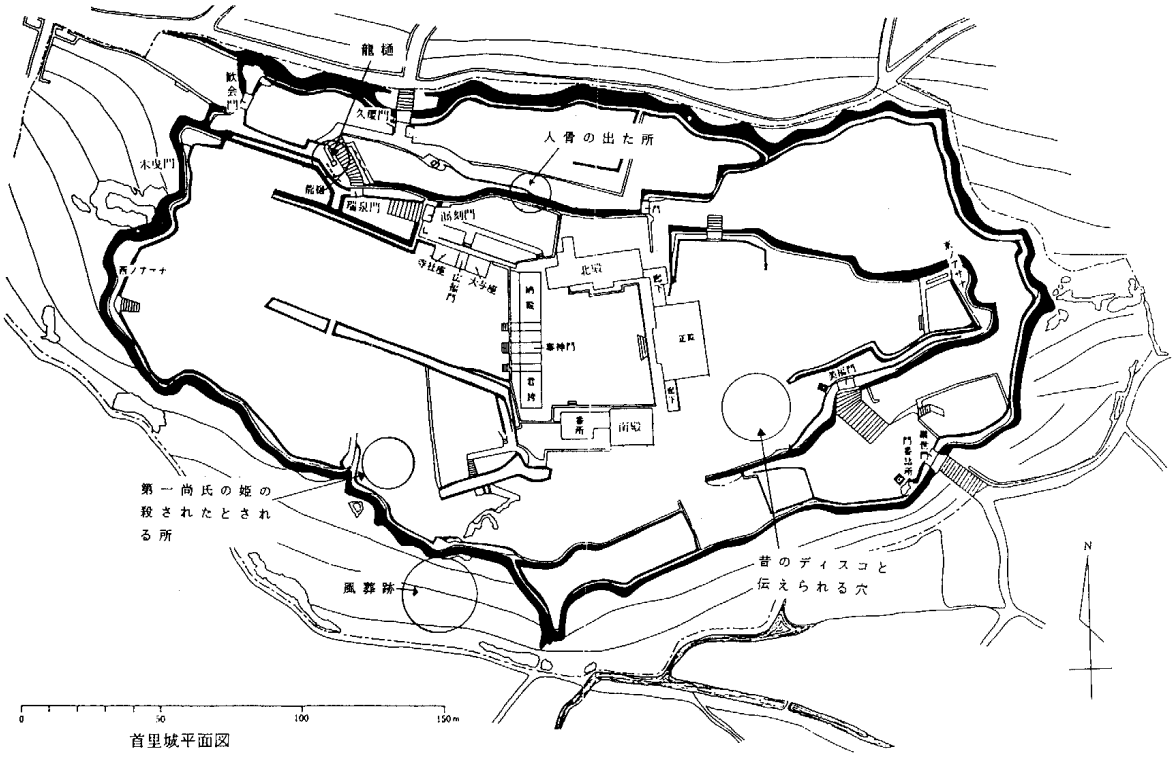
宗教関係その他
『聖書』（新共同訳）1988、日本聖書教会
『アポクリファ』（旧約聖書外典）1981、聖公会出版
ミメップ編『旧約聖書の世界』1984、講談社
マックス・ヴェーバー『古代ユダヤ教』（全三冊）1996、岩波書店
柳宗玄『西洋の誕生』1971、新潮社
下村寅太郎『アッシシの聖フランシス』1965、南窓社
Johannes Jörgensen ; Saint Francis of Assisi (E. Edition) 1912、Longmans, Green & Co., Inc.
（邦訳『アッシジの聖フランシスコ』1977、講談社）
ボールスドン編『ローマ人』1971、岩波書店
土居光知『古代伝説と文学』1960、岩波書店
鎌倉芳太郎『セレベス沖縄　発掘古陶瓷』1976、国書刊行会
A. J. トインビー『歴史の教訓』1957、岩波書店
F. W. Nietzche, Die fröliche Wissenschaft, 1882
（邦訳：レーヴィット『ニーチェの哲学』1960、岩波書店他）
伊藤義教『ゾロアスター研究』1979、岩波書店
伊藤義教『ゾロアスター教論集』2001、平河出版社

首里城関係
首里城復元期成会編『甦る首里城』1993

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts



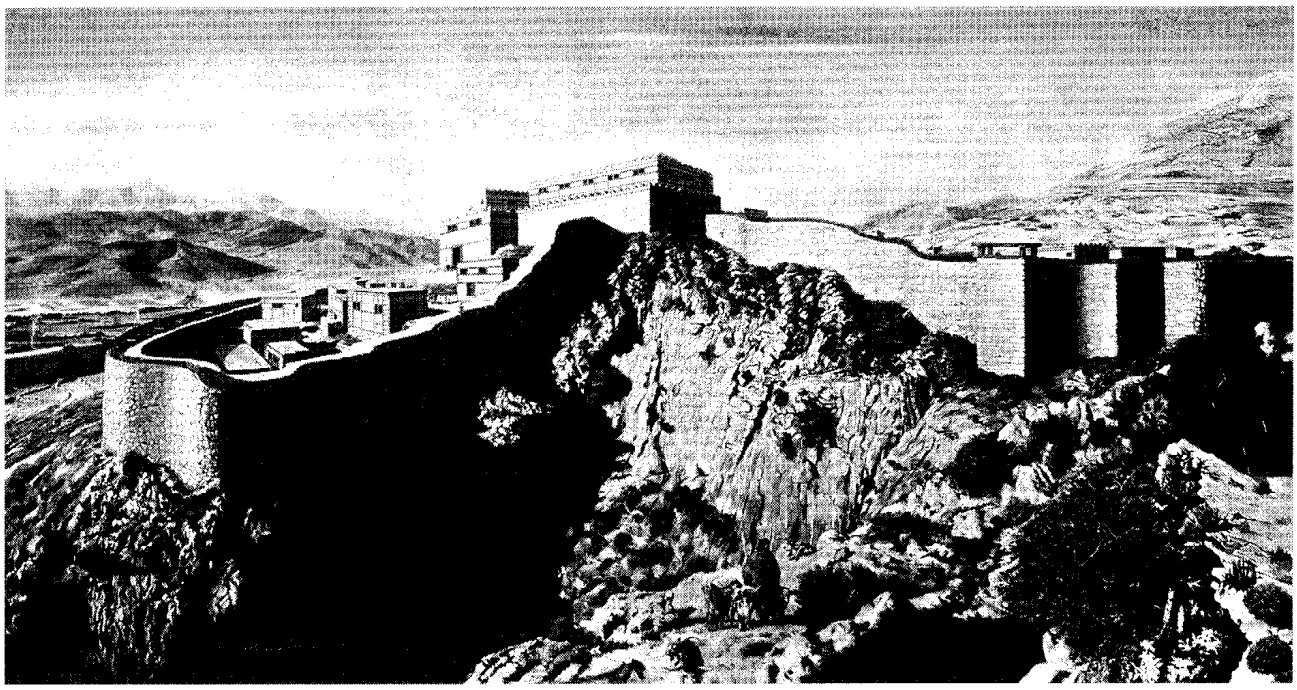


首里城平面図

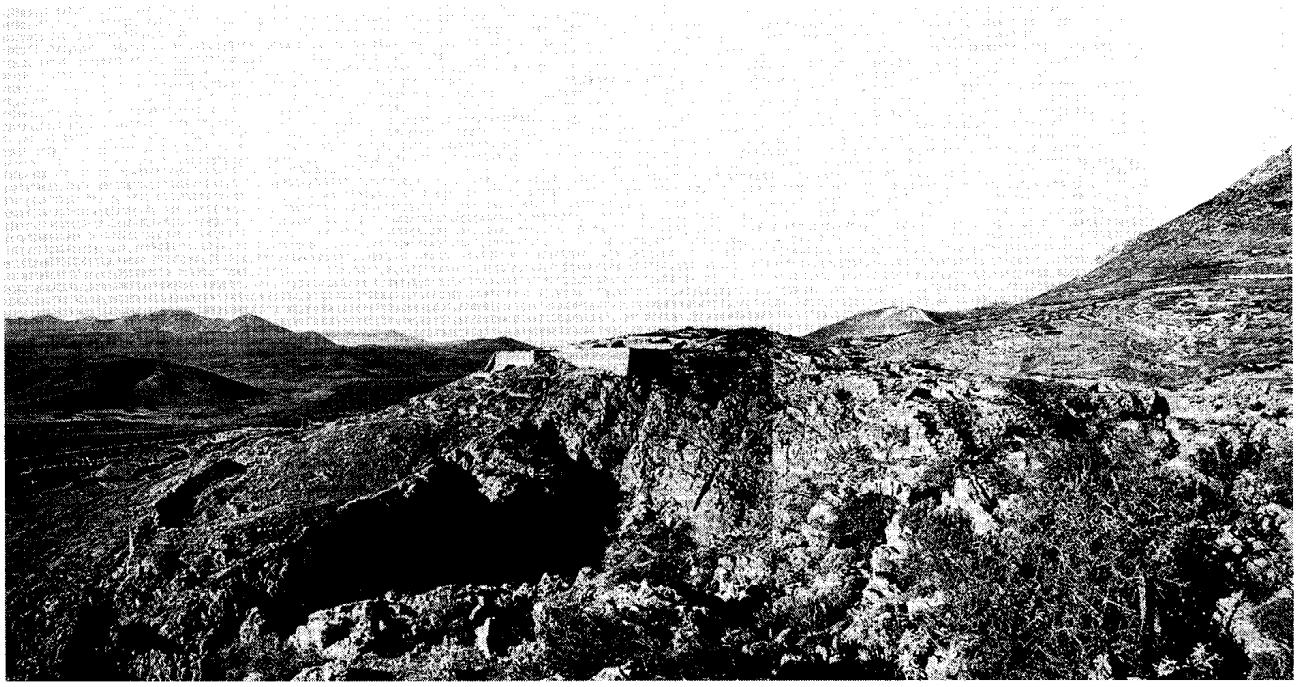
（加藤真司「首里城復元に携わって」〔首里城復元期成会編『甦る首里城』収録〕より転載）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts



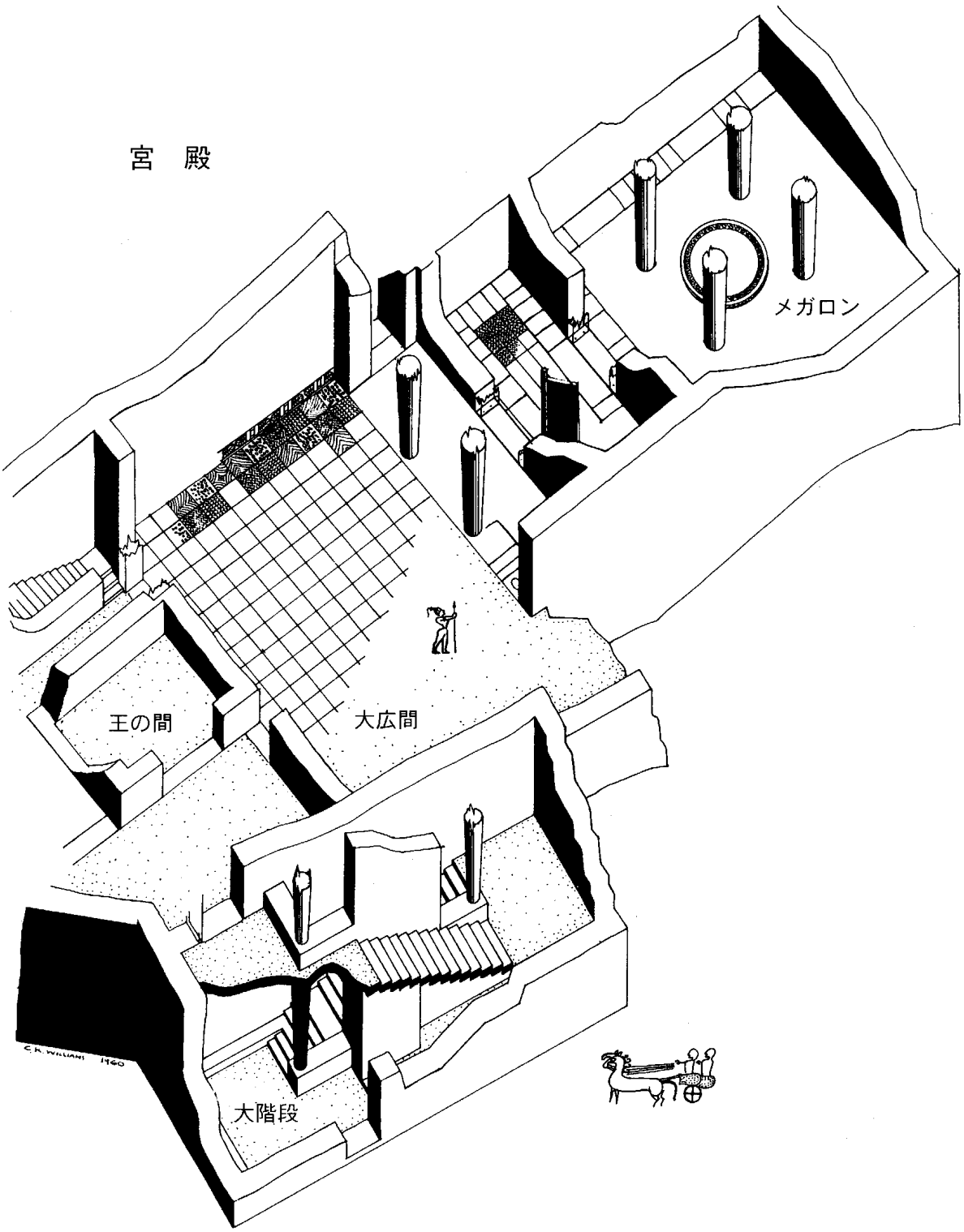
ミュケーナイ城塞復元図（アルトン・S. トビイの図による）



南西から見た現在の城塞（ルドルフ・F. ツァリンガー撮影）

NII-Electronic Library Service

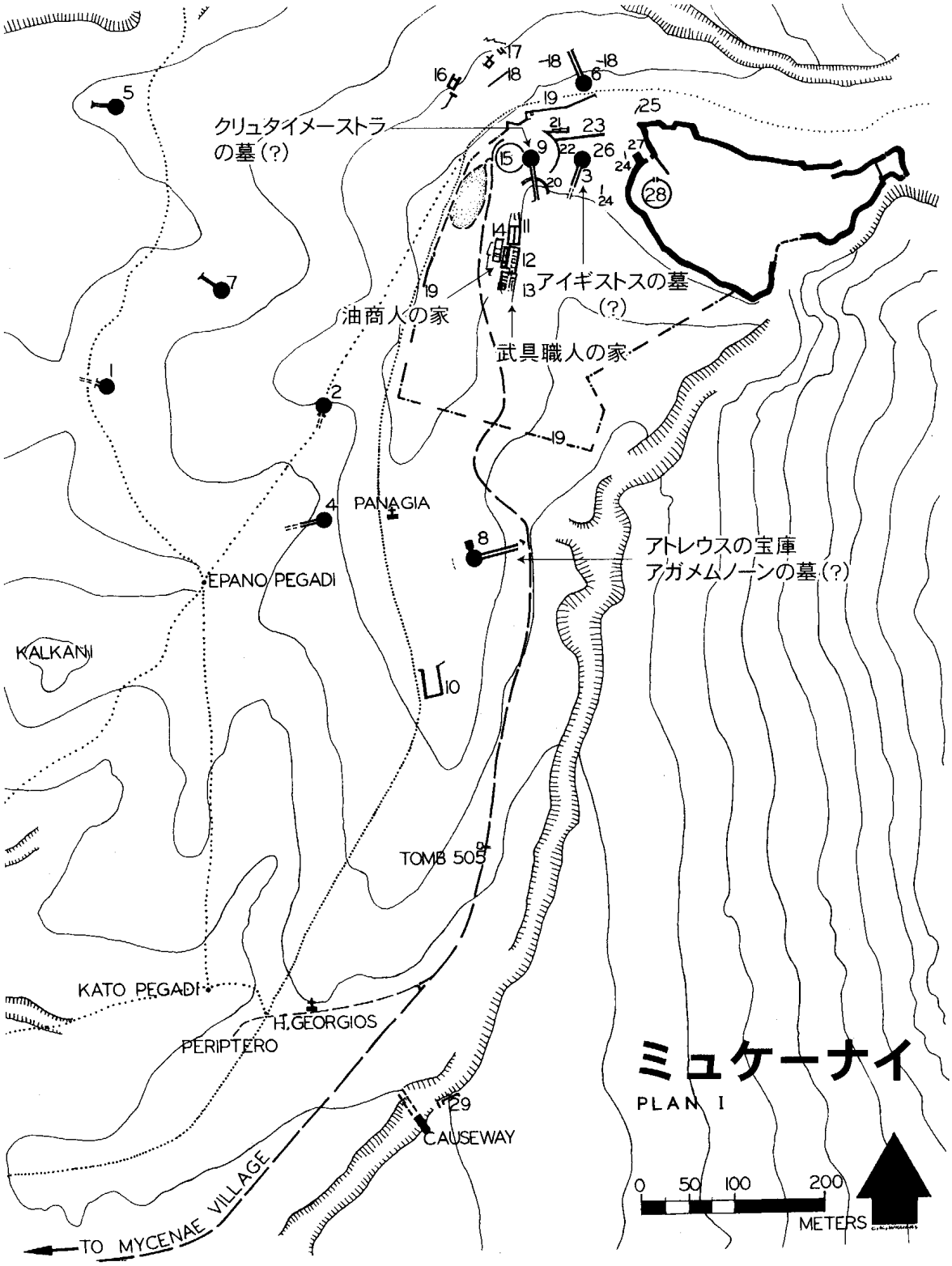
Okinawa Prefectural University of Arts



宮殿内部俯瞰図

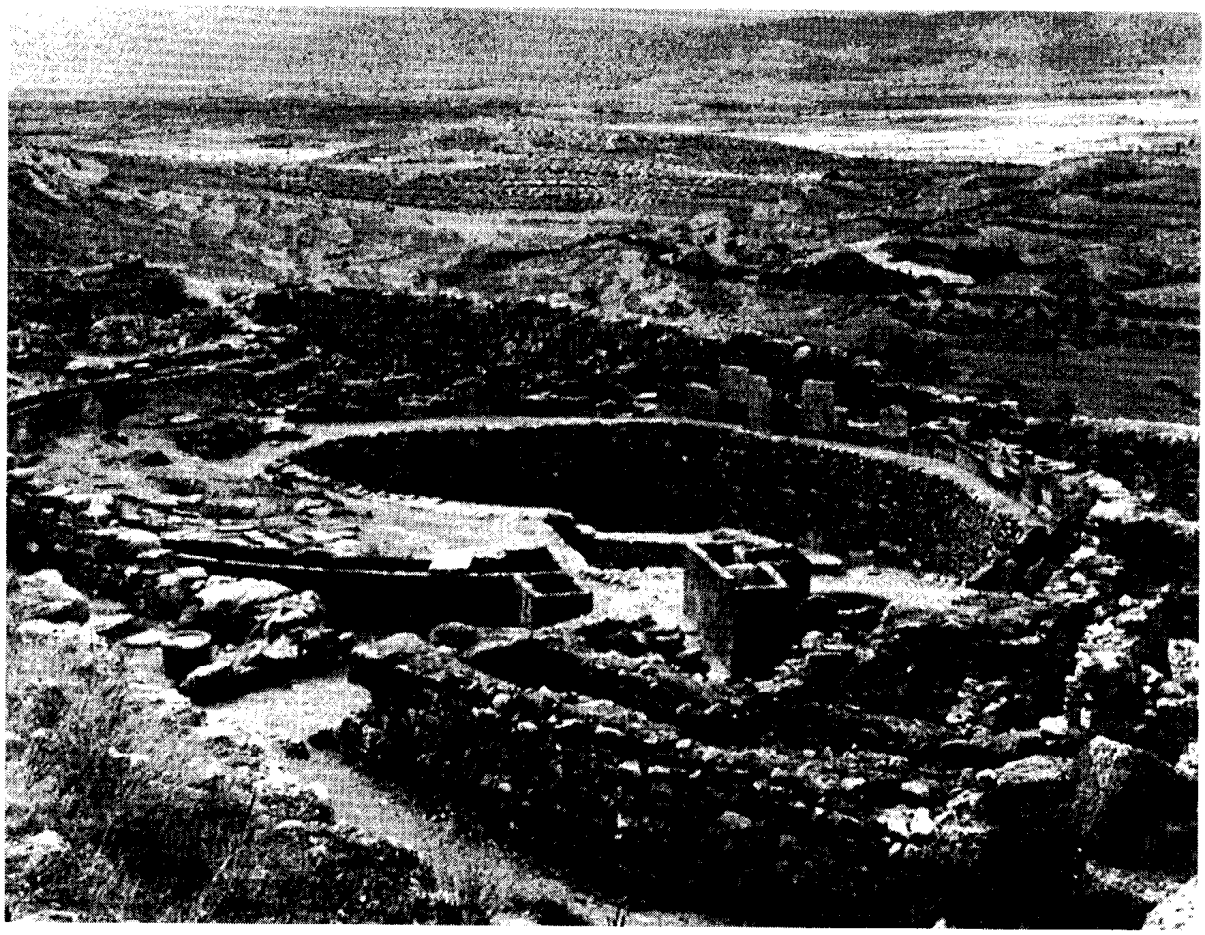
NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts



NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts



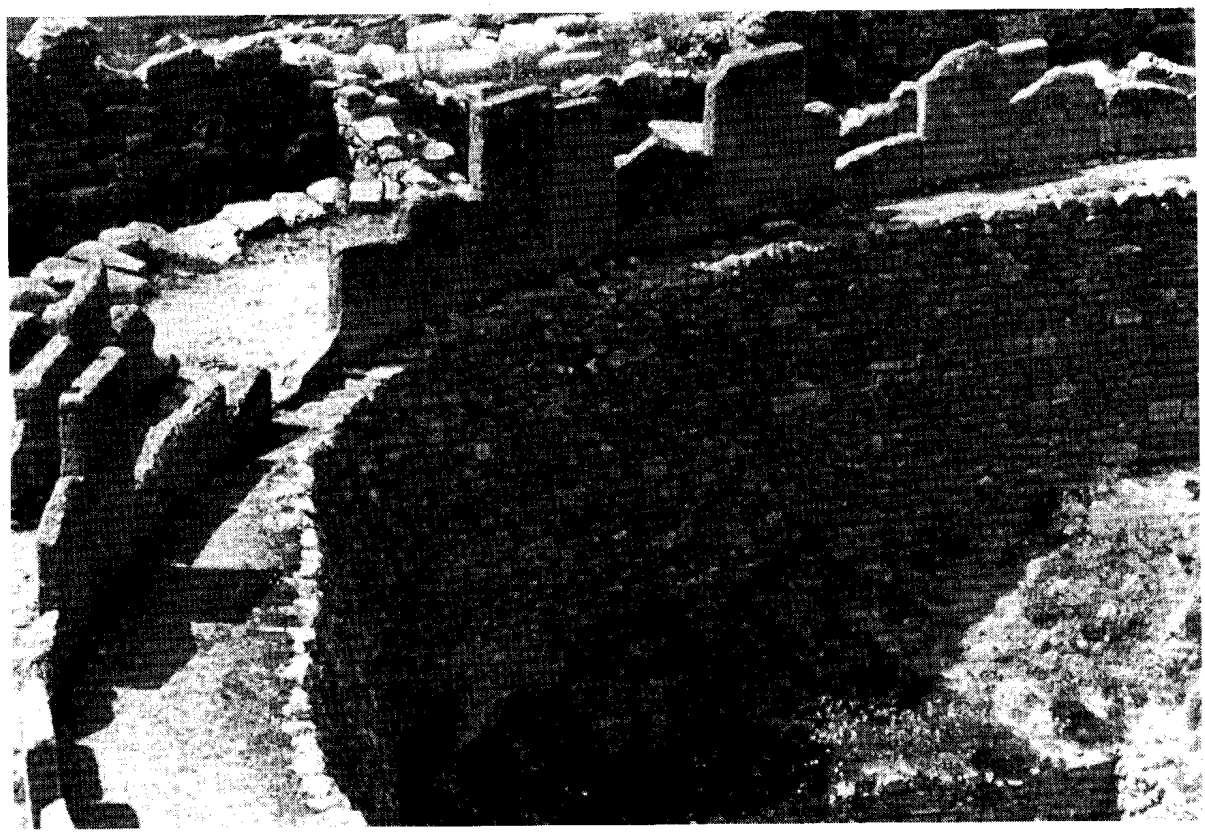
円形墓全景（G. E. Mylonas）

円形墓から出土した黄金のマスク。アガメムノンのものではないかといわれている。
（アテネ国立美術館蔵：G. E. Mylonas）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

円形墓細部（筆者撮影）



円形墓の石壁（筆者撮影）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

ミュケーナイ出土の地母神デーメーテールといわれている像
（三体のうちの二体、象牙製。アテネ国立美術館蔵）
(Ivories from Mycenae による)

NII-Electronic Library Service